

AI、ビッグデータ、スマートシティ 中国のテック社会実装を読み解く

講演者 高口康太 氏 (ジャーナリスト、千葉大学客員教授)



- 中国の AI 活用は「監視社会」と一面的に語られがちだが、その実態はより複雑だ。本講演では、誤解も多い「社会信用システム」の実態や、アリババのセサミクレジットに代表される、既存の発展段階を飛び越えるリープフロッグ的なサービスが、いかに市民の利便性向上と引き換えに進んできたかを解説する。そこには中国の人々の「プライバシーと利便性の取引」という意識が垣間見える。
- だが、サービスと対価が釣り合いになれば、「取引」は成立しない。「ビッグデータによる常連客殺し」やギグワーカーの過度な労働強化といった問題が顕在化する中、中国にも変化が生じている。中国政府も個人情報保護法の整備など対応を強化し、テックのダイナミックな発展を支えた「先放後管」(まず自由に発展させ、その後に管理する)という規制方針も変化している。本講演では、中国テックの現状とそれを支える社会的背景について、近年の変化を踏まえつつ、読み解いていきたい。

参考文献 梶谷懐、高口康太『ピークアウトする中国「殺到する経済」と「合理的バブル」の限界』文春新書、2025 年
梶谷懐、高口康太『幸福な監視国家・中国』NHK 新書、2019 年

高口 康太 1976 年生まれ。中国経済、中国企業、在日中国人社会などを中心に『月刊文藝春秋』『週刊東洋経済』などのメディアに寄稿。『ピークアウトする中国「殺到する経済」と「合理的バブル」の限界』(文春新書、梶谷懐氏との共著)、『中国“コロナ封じ”の虚実—デジタル監視は 14 億人を統制できるか』(中央公論新社)、『幸福な監視国家・中国』(NHK 出版、梶谷懐との共著)、『プロトタイプシティ 深圳と世界的イノベーション』(KADOKAWA、高須正和との共編)など著作多数

日時 2025 年 6 月 22 日(日) 14:00~16:00

会場 東京大学 駒場キャンパス 国際教育研究棟 314 号室
※無料、申し込み不要